

伊太八編

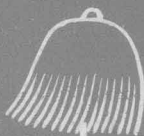
長谷川仲

三
三
三

伊太八孺



長谷川伸



桃源社版

目次

伊太八稿
新版大衆小説名作選
桃源社版

伊太八編

極	談	傘	肩	惡	二	敗	夜	寢	三	味	ふ	闇	寄	欄	只
樂	の	の	の	技	人	北			毛	噲	ど	の	角		の
へ	判	れ	上	妙	侍	者	襲	首	猫	飯	繩	菊	力	干	判
.....															
一三八	一九九	一三〇	一三〇	一一〇	一一〇	一〇一	九二	七三	六四	五至	四五	三五	二六	一六	七

間宮幸之助復讐記

間	殺	請	負	一七
藁	人	形		一六
だ	に			一六
主	君	相	手	一五
忒	争	ひ		一三
愚	兄			一三
先	生	忒		一一
決	闘	見	物	一〇
袋	叩	き		一〇
水	一	杯		〇九
煽		動		〇九
無		法		〇八
一	つ	の	料	〇七
簡				〇七

装幀 清水三重三

只の談判

その頃、兩國橋は矢の倉の南から本所一ツ目へ假橋が架つてゐた。天和、貞享、元祿と三季に跨がつた假橋だつたが、今ここでは徳川綱吉が將軍宣下して久しからず、犬公方に墜ちない英武な時代、下馬將軍酒井雅樂頭忠清が失脚して四年目、貞享元年九月だから、假橋は古りたりといへども、まだ足かけ四年目、しかし、もう大分疲れが見えてゐた。

虫の音すがれて秋草の眺めも老にはひつたその月中旬、營中では重陽御祝儀の九日から小袖に足袋だが、市中ではまだ給ばかり。

きのふ大あらしがあつてけふの兩國假橋の下は、上から落ちる絞り水の流れはやく、ぽかりぽかりとこはれ道具が、月あかりのもとでめぐつて去る。それだけにあらしのあとの荒涼さが、歴々かたられてゐる宵の口の橋の眞中で、

「おいおい、ちよいと待つんだよお前は」

と、うしろから聲をかけられ、ギクリとしたのは、以前は巾着切、今は額に汗をかき、まともに食つてゐる伊太八といふ二十七になる男。素裕、素足、細目の帯、草履ばきと、身も軽い、ふところも輕さうな姿。

「あツしですか、お聲のかかつたのは」と、ぐりと向きをかへ、近づいてくる呼びとめ主を、不審まなこで透かし見ながら、「どなたで」

「待つのはお前だ」

といふは、でツぷりあぶらぶとりの三十七八歳、洒落てゐてぢみで値の高い袷に羽織がそろひ物、見たところ錢金の融通が樂につくらしい、人入れ元締でもあらうかといふ男。

「さやうで。して、あツしにご用つてのは」

「お前、伊太八といふだらう」

でツぷり男は胸を張つて、鋭い眼の光を伊太八の顔に浴びせかけ、齒を見せてニツと笑つた。

「おや、あツしの名をどうしてご存じ」

「おれはお前にいいことをいふのだから、その氣で聞かぬえと間違うぜ」

「え」

「手前、お倅をあきらめろ、なあ、わかつただらう。その方が身のためだ」

「はてね」

「何だ、はてねだと。若え奴はのぼせ症だ、熱をもつのもホンの一刻だけだ。あきらめろ、わかつたなあ」

「藪から棒とはこのことだ、何の事だいこれは」

「嚙んでふくめなくちや手前にやわからぬえか」

「さうぢやあるめえ」

かさにかかつたいひ方が癪に觸つた伊太八、眞正面からでツぶり男を見返した。

「おれが勝手に惚れてる女のことを、月夜だからツて橋の眞ん中で、見ず知らずの人があきらめろとは、深切だか手前勝手だかわからぬえけど、無風流の色氣なしには違ひねえや」

「そんな腿を叩くのか伊太公」

「一體お前さんはどういふ身柄のお方です」

「手前、おれを知らぬえのか、こいつはあきれた」

「そんなに名高いお方ですか」

「馬鹿にするのかこいつ。まあいい、ほかの時と違ふから大目に見てやらう」

「ちえツ、何をおれが悪いことでもしやしめえし」

横を向いてつぶやく伊太八に、手をかけぬばかりに自烈込んだでツぶり男。

「手前の元は何だか知つてゐるぞ」

「知つてゐるつて。はあ。さうですか、知つてたらそれでいいやね」

「手前みたいな奴は茶屋小屋へ呼んで、話をつける程の値打はねえ、橋の上だらうと天井裏だらうと、行き當りバツタリで澤山だ。悪いことはいはねえ、あきらめちまへ、さもねえと手前飛ンだことになるぞ」

「殺すんですか、あツしをね。——へへんだ」

「まさか殺すものか、殺すほどの値打がねえからなあ」

「よく値打がねえねえといふお方だ、そんなに値打のねえ奴に、お俊ちゃんをあきらめると頼む値打はねえだらうに」

「頼むものか、教へてやつてゐるんだ。手前の身の爲めになるやうにとな」

「たいしたご親切だ」

「それがおれにいふ拶挨か、あきれ返つた奴だ。

う、わ、さは聞いてゐたが、こんな馬鹿とは知らなかつた、あきれ返つた奴だ」

「何をいふんだなあ。ヘン、自分の名もいはねえで、心安さうに伊太公だなんていふ癖に、自分は高い高いからものをいつて、獨でよがつてゐやがらあ」

「何だと！」

「あきれ返つたのはこつちの方だ、お前さんの方であきれ返つては方角違ひだ」

「食つてかかるのか」

「だれがそんな肥ツちよを食ひたがるものか、おれのこの口を見てください、生れつき至つてお尋常なんですぜ」

「野郎ッ」と、でツぷり男は少し顔を青くしたが、考へ鎮めたと見えて、一旦握りかためた拳を解いた。「今の返事をしろ」

返事次第では覺悟があるぞと、口には出さぬが、眼がさう光つた。伊太八は存外のん氣な顔つき。

「返事もしようが、名を聞かせてくださいな」

「石町いしちょうの駕辰とはおれだ」

「へえ、石町へ行つてさう聞けばわかるのですか」

「シラばくれてやがる」

「さう怒つたつていけねえやな、わからねえから聞いてるんだ」

「お俊の方はどうだ」

「ああ、あの方ですか」

「ウンと承知したんだな。さうだらうが」

「そんな、そりや無法だ、先くぐりしておれの返事の代りを勤めちやいけませんや」

「あきらめられねえといふのか。さうではなからう」

「なからうではねえ方なんで」

「何だと。譯のわからねえことをいふな」

「落着いて聞いてくださいよ。おれはね、あきらめられねえといふのか、さうぢやなからうといふから、そのなからうぢやねえ方だと」

「面倒臭くいふな、江戸ツ子は物をハツキリいふもんだ」

「おや。へええ、おまはん江戸ツ子だつたのか」

「ちよッ、なめたことをいふ奴だ。やい伊太公、返事をしろ、手短かいがいいぞ、どつちだ」

「どつちだと聞かれりやあ、いふ事は一つしかねえ」

「おや、何で後じさりをそんなにするんだ」

「返事が氣に入らねえと殴りさうだからさ。とツと、そんなにこつちへ來てくれてはおれが迷惑す

る」

「何てまあ口のうるさい南瓜かぼちや野郎なんだらう」

「こんな眼鼻立の南瓜があるもんか、あつたら世話してくれ、見世物に出して錢儲けすらあ」

「ツベゴベぬかさ返事しろ」

「さうさう、その返事が遅くなつた、返事をしなすぜ肥つた親方」

「ちよッ、むだははぶけ」

「ぢや、たつた一聲」

「野郎、あきらめられねえとぬかす氣だな」

「それ程わかつてるのに何故うるさくきくのだ」

「爲にならねえが承知か」

「承知だ。惚れた女の爲には痛い腹を切つて後悔しねえ男があつたとさ」

「手前のは腹ではねえ、首へ縄だ。これを見ろ」
駕辰がいやがらせに見せびらかす氣の袂から出した捕り縄。

「やッ―親方は親分なんですか」

伊太八は駕辰の手にある不吉な捕縄を、顔曇ら

せてちらりと見た眼をあげ、シゲシゲでツぶり男の月が隈取つた顔を見上げた。

「伊太公、並の人間らしく口をきくな。手前そんな男ではねえ、もつと綾のかかつた代物だ。それ、この捕縄とは敵同士の身の上のくせにシラ規帳面らしい口をきくな」

「そんなにいふと、おれがいかにも生れぞくないみたいだ」

「生れぞくないでねえつもりか、まともな體だつたら何でおれを怖がるんだ、何で臆病犬みたいに後じさりばかりしてるんだ」

「肥^{ふと}ッちよのそばは蒸し暑いからさ」

「野郎、どこまでおれをなめやがる」

「とツとツと、そばへこられちや物騒だ。そんな體をなめられるかい、ショッペいにきまつてらあ」

伊太八が一足さがれば駕辰が一足すすむ、辰がツカツカと二足三足遠めになれば、伊太八の方でもスルスルと後じさりが急になる。今の分ではこ

の二人、かうしてどこまでもいたちどツこだ。

「伊太公、手前ぐらの譯のわからねえ奴はねえぞ、おれが手前をヒンなぐらうと思へば雜作もねえんだ。おれはお役をもつてるんだぞ、それを忘れてやがるな」

「忘れるものか、忘れようにもそんなに商賣道具を見せびらかせてゐるのぢや忘れつこねえや」

「年貢を納めさせれば譯なく形はつくが、それではあんまり惡どいから物靜かに話をしてやるのに、あきらめられねえとはどの口でぬかすんだ」

「この料簡がこの口にいはせるんだ」

「逃げるな！」

「逃げるとも、罪はねえが捉まつちやう、せい、や」

「是非がねえからご用にするぞ」

「そんなうしろ暗いところはねえんだ」

「仲間の者に並ぶ腕のねえ手前だ」

「そりや昔はさうさ」

「今でもさうだらう」

「何ッ」

くわつとなつて伊太八、身ぶるひして進み出たその權幕に、駕辰はすこし吞まれ氣味、捕繩を袂へ器用に落とし、立ち直つて腰をすゑた。

「伊太公。野方圖をいふな。どうしても手前ウンといはねえか」

「おれは堅氣だ、兄貴の厄介になつて堅く暮してゐるおれに手前は何の因縁で難癖つける」

「そんな事よりお俊のことだ」

「厭だい。矢でも鐵砲でも持つてこい。手前がどんな野郎に買はれてこんな處へ出てきたか、おれに見當がついてゐるぞ」

「ようし。暗いところへボーイ遣るぞ」

駕辰の偏平肥大の顔に、土氣色がにじみ出てきたが、月のもとだけにそれはわからぬ、眼に殺氣の油光り、これはわかる。見逃さぬ伊太八だ。

「暗いところは生得嫌ひ、おれは明るいところが性にあつてゐる」

「うぬ！」

「追つかけるおれは逃げる」

「ご用だッ」

「おや、ご用と聲をかけたな。さあ縛れ」

今までとは逆に伊太八、ご用聲を聞くと共に棒ぐひ、立ちに立ちどまつた。

「さあ縛れ。以前のことはともあれ、今のおれは清淨だ。いつのいつかにおれがご用繩をかけられるやうな事をした、それを聞かう」

「盗人ただけしいとは手前のことだ」

「べら棒め、おれは當時素ッ堅氣だ、素ッ堅氣が悪いか縛るといふのか。皆さん、そこらで見えておゐでの皆さん。あッしはずつと前に少々悪いことをした人間ですが、改心して今日をまッとうに暮らしてゐるのに、この人が改心したのが氣に入らぬとて、女の恨みで縛りたがります。あッしが縛られるのが本筋でせうか」

「いや縛られるな」と、どこやらで男の聲。

（餘計なことをいふ奴は誰だ！）と、怒りの眼を横にひらめかせた駕辰の前に、見物中だつた人影

から割つて出てきた武士が一人、月にそむいてゐるので顔は知れねど、びつこで、猪首、歩く度びに着流しのすそが異様に波をうち、肩が不思議に高低を描く。

その武士、駕辰と伊太八の睨みあひの傍まできて、ぬツと立つた。

「拙者、見てゐてやる、いづれが強いか、やつて見ろ」と、譚^{から}ふやうな妙な口調。

「へえ、これはどなた様か存じませんが、お役中にござります、お控へ願ひます」

駕辰は切り口上、武士に眼をむけずにいつてのけた、それに早口で押冠せた伊太八。

「旦那はあつしに縛られるなとおつしやいましたね」

「うむいつた、その方が面白い」

辰が眼をギロリと武士に向く。

「そりや何故で？」

「縛るんなら面をみた時さつさとやれ、四の五のと押問答の縄れから、それでは縛る、とは變だ」

「いえ、手前はこの惡黨に理解^{りかい}をいつて聞かせたんで」

「女のことでか」

「えッ。女の事には相違^{ちがひ}ございませんが、これには深い譚があつて」

「十手持ちのお前とその野郎とが一つ女を張合つてゐるのか。うむ、さうか。それで女は年若だけにそいつになびく氣色があるので、犬のくその敵うちか。うむ、さうか」

「もしもしお武家様。さうおつしやると變に手前が憎まれ役をしてるやうに聞えます」

「おや、さうか。常人、憎まれぬつもりでしてゐたのか」

どうやらこの武士、こんな服装^{ふさう}はしてゐるが、ひと皮剥けば伊太八の仲間だらうと觀破した駕辰、ぐいと態度を更めた。

「お武家さん、打棄つといってください、手前は手前の流儀でこの男に縄をつけて曳くのです」

「馬鹿いふな」

「馬鹿とは何だ」

「何」と、武士は刀の柄を平手でたたき、「頬ツベたを叩いて氣をつけろと口にいへ。妙なひどくはないをして得をとる奴は滅多にないぞ、なんて勤番者ぢやなし、いやな事はあんまりいふまい、見つともないからなう。だが、縛る縛るといふが、手拭で縛るのか、それあ短いぞ」

「え」

「帶かふんどし、そんなら早く解いてかからぬと間にあふまい」

「妙なことばかりおつしやる方だ、おだまんなすつて、ただで見物をなすつておゐでなさいまし」
さつき袂の底へ流し込んだ捕縄、それを器用に取出しに、袖口からするりと入れた左手が、モゴモゴと袂の中であわててゐた。

伊太八は、辰を眺めてすこぶる眞顔だ。

「どうした。ハハハ、それ見ろ、不淨の縄がなからうが」と、武士は猪首をそらせ、口をあいて、白い齒を月に向けた。

「おやツ——おやツ」

辰の顔が驚きに縮み、怪しみにしがんだ揚句、白眼を伊太八に向けた。

「やつたなこの野郎」

「何を、おれが知るか」

「素早え奴だ、出せおれの捕縄を」

といふ辰に武士が。

「捕縄ならその男は持つてをらぬ、お前の足許にある様子だがなあ」

「え」

「もつとうしろだ。まだ落ちてるぞ十手が。うしろの方二尺ばかり。やれ漸くわかつたか」

足許の捕縄、うしろの十手をあわてて拾つた駕辰、伊太八が姿を晦ましたのに氣がつかずにゐた。

「やりあがつたなあお得意を。畜生ツ」

はきしり
切齒をする駕辰に武士は笑顔で問ひをかけた。

「何だあの男は—たい」

「どつちへ行きやがつた。おい、その人、今の

奴はどつちへ行つた」

兎物に集まつてゐた男女のうちで、伊太八の逃げた方角を教へたものはホンの一人。

「さうか」

といふが早い、あせり立つて追ひにかかる辰に、武士はまたしても妙なことをいつた。

「追うな追うな」

「何いつてやがるんでえ」

と辰は口のうちに悪態をついて駆け出しかける、そのうしろにびつこの波を打たせてきた武士。

「何いつてやがるんでえはない、追うは無駄だといふのだ」

「こつちは急がしいのだ、うちちやつといてください」

「さういふな。お前は今の奴と一つ女を張つてゐるのだらうが」

「仕様がねえな、前へ立ちふさがつたりして。旦那はお役に故障をつけるんですか」

「十手持ちは直ぐさういふことをいふから嫌はれるのだ、その傳でお俊とやらにも振られたか」

「お俊を張合つてゐるのはおれの弟、いや何でもありません、旦那のやうに、さう前を絶ち切つては困ります」

「面白さうな事だから少々深くききたい」

「そんな事いつてゐるうちに、野郎がどつかへ行つちまひます」

「張つてゐる女があるからは、いづれ女のところへ現れるだらうが、としたら、押へるものならその節押へればいい。氣の利いた風の男だが血のめぐりは少々よくない」

「旦那はご存じないからそんな事をいつてゐるんだ。あいつと來たら、いづどこから現れるか見當のつかねえ化物同然の代物だ、見つけたのを最後にして話をつけねえと飛んだ後手を踏んでしまひます。ああ仕様がねえ、きつともう、いくら探したつて判りつこねえだらう」

落膽かつかりして太息といきをつく駕辰を眺めて武士。

「お俊とやらはどこの女だ」

「え」

「いふのは厭か」

辰はそれに答へず、ほつとまた息をついた。

「今の男は、全く巾着切か」

（何をいやがる）、といふ眼つきをちらりとした辰、武士に眼もくれず、腕を組み、もう散りかけた見物を突つ切つて一ツ目の方へ。

「こいつ拙者を相手にせぬな、ハハハ」

といつて、武士は去りもせず、力が抜けてトボトボ歸る駕辰の、橋板に落ちるでツぶりした影を見送つてゐた。

「どうれ」と口のうち、武士は矢の倉南へちんばの波を橋板に踊らせながら、ヒヨコン、ヒヨコンと歩いて行つた。

橋が盡きかけたところで、

「關根の旦那、ただ今はどうも」

と、迎へに出たかのやうに、現れたのは伊太八だ。

「や、わが姓名を——」

どうして、こいつが我が姓を知つてゐるか、物驚きをせぬ關根彌次郎安周^{やすちか}だが、いささか不意打に猪首をふつた、が、やがて。

「ははあ、やつたなこいつ。拙者^{せっしゃ}ふところの名札をとつて見たのだらう。この巾着切め！」

「詫ッ——旦那、ご免なさい」

欄 干

橋の欄干に兩肘ついて、見るともなしに時々見る橋下の流れ、水の香が、高く、ふんと鼻をうつ。

「すると、そのお俊といふのは」

「お袋とたつた二人ぎりでございます」

「何をして食つてゐるのだ」

「土佐節が上手ですから、それで食べてをります

ので」

「食へるのか」

「結構やつてをりますやうで」